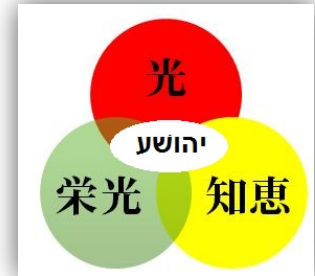


シャハイナ・グローリーの諸相 (1)

【聖書箇所】 出エジプト記 3 章 1～14 節

ベレーシート

●神がやみの中から呼び出された「光」(「オール」 אור)の概念は、世界の基が置かれる前から「あらかじめ定められていた」神ご自身の緻密なご計画、深淵なみこころ、そして神の御旨と目的を含んだものです。その「光」と密接に関係する語彙として二つの語彙を前回で紹介しました。その一つは、天地創造にかかわった神の「知恵」(「ホフマー」 חֵכְמָה)で、「人の心に思い浮かんだことのないもの」です。そしてもう一つは、永遠の神のうちにある信頼という重い事柄としての「栄光」(ヘブル語では「カーヴォード」 כְבוֹד)



があることをお話ししました。これらの三つに共通する特徴は、天地創造の前から存在するものであること。またいずれも目に見えない根源的事柄であるということです。そしてこれらの三つが人間の目に見える形で現われる時、それが「シャハイナ・グローリー」ということばで表現されるのです。神の歴史の中で目に見える形として現わされた「シャハイナ・グローリー」の表象は、光、火、煙、雲、雷、いなずま、密雲(やみ)、そして御使いなどですが、その極めつけは人となられたイエシュアご自身です。しかし重要なことは、他のいずれの表象の中にも御子「イエシュア」の存在があるということを心に留めていただきたいと思います。なぜなら、この方こそ「光」と「知恵」と「栄光」を結びつけている方だからです。

●やみの中から呼び出された光である「イエシュア」、天地創造にかかわった知恵である「イエシュア」、そして神の栄光である「イエシュア」が、神の歴史の中でどのように現われているか、その様相を見て行きたいと思います。今回はその第一回目で、イスラエルの民をエジプトから救い出したモーセに現わされた「シャハイナ・グローリー」に注目したいと思います。この現われが、神のご計画にとっていかなる意味を持ち、かつ、それに触れたモーセの生涯においてどのような意味を持ったのかを考えてみたいと思います。ちなみに、次回は、幕屋それ自体に現わされたシャハイナ・グローリーについて取り上げる予定です。まずは、今回の聖書箇所として出エジプト記 3 章 1～10 節を読んでみましょう。

【新改訳改訂第3版】 出エジプト記 3 章 1～10 節

- 1 モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。
- 2 すると【主】の使いが彼に、現れた。柴の中の火の炎の中であつた。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。
- 3 モーセは言った。「なぜ柴が燃えていかないのか、あちらへ行ってこの大なる光景を見ることにしよう。」
- 4 【主】は彼が横切つて見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ」と仰せられた。彼は「はい、ここにおります」と答えた。

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

- 5 神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」
- 6 また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」
モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。
- 7 【主】は仰せられた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。」
- 8 わたしが下って来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所に、彼らを上らせるためだ。
- 9 見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た。
- 10 今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」

1. 燃えているのに燃え尽きない柴の光景

●今回の中心人物は**モーセ**です。ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていたとあります。「ミデヤン」はアブラハムの子の名前です(創世記 25:2)。ですから、この民族はイスラエルと血がつながっているのです。さて、モーセがイテロの羊の群れを荒野の西側に追って行き、**神の山ホレブ**にやって来たとあります。この「ホレブ」は「神の山」であり、また「シナイ山」とも言われます(従来の説)。ヨセファスによれば、この辺りで最も高い山(海拔 2,580m)で、羊飼いたちは神の住む聖なる山として近づかなかったようです(「ユダヤ古代史 2巻、12章」)。神の山ホレブは、後に炎の預言者エリヤがカルメル山でバアルの預言者たちと対決した後に、神の御旨を求めて四十日四十夜歩いてたどりついた場所でもあります。また使徒パウロがダマスコ途上で「天からの光」を受けて後、御子からの直接の啓示を受けるために、「アラビアに出て行き、またダマスコに戻りました」(ガラテヤ 1:17)とあることから、パウロはこの「神の山」に行った可能性があります。またこの山は、エジプトから脱出したイスラエルの民が神と合意に基づく契約を交わした場所でもあります。



●この神の山の東側にイテロの家があったと思われます。そこはモーセが40年前にエジプトから逃れてたどり着いた場所でした。モーセが羊の群れを西側に追って行ったとき、ホレブの山の麓で【主】の使いが彼に現れたのです。【主】の使いが柴の中の火の炎の中に現れたにもかかわらず、その柴が燃え尽きなかった光景を見て、モーセがこの大いなる(不思議な)光景を見ようと近づいたとき、「モーセ、モーセ」と呼ぶ主の声を聞いたのです。ここでは【主】の使いが、【主】に変わり、そして神に変わっています。明らかに、御子イエシュアがここで姿を現わしていると考えられます。

●ところで、神はなぜ「モーセ、モーセ」と二度も名を呼んだのでしょうか。使徒パウロの場合もヘブル語で「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するの



か」とイエシュアから呼びかけられています(使徒 26:14)。またイエシュアは自分を裏切るペテロに対しても「シモン、シモン」と呼びかけています(ルカ 22:33)。モーセにしても、サウロにしても、ペテロにしても、共通していることは、彼らがみな神の偉大な働きを担う代表的な人物だということです。最後のさばきつかさと言われたサムエルもそうでした(I サムエル 3:10)。名前を二度重ねて呼ばれた人物がもう一人います。それは「マルタ」です(ルカ 10:41)。彼女自身の名をイエシュアが二度も言ったのにはそれなりの大切な意味があるからです。思うにここではマルタをたしなめる形で語っているのですが、それはマリヤのあり方こそ御国において神が求める重要な姿勢であったからです。マルタの名を二度も呼ぶことによってそれを示そうとしたのではないかと考えます。

●さて、近づいて来るモーセに対して、神は「**ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。**」と仰せられました。この太字のフレーズを全く文字通り語られた人物がもう一人います。それはモーセの従者であったヨシュアです。ヨルダン川を渡ってギルガルで宿営していたヨシュアの前に、「抜き身の剣を手を持って」立ちはだかった「ひとりの人」がいました。その「ひとりの人」は「わたしは主の軍の将として、今、来たのだ。」と。ヨシュアは顔を地につけて伏し拝み、彼に、「わが主は、何をしもべに告げられるのですか。」と尋ねます。すると主の軍の将は「**あなたの足のはきものを脱げ。あなたの立っている場所は聖なる所である。**」(ヨシュア記 5:13~15) と語られました。これは何を意味しているのでしょうか。

●モーセにしても、ヨシュアにしても、いずれもこれから神の使命が語り伝えられようとしています。モーセには神の民イスラエルをエジプトの強大な支配から連れ出すという務めの前にを、もう一方のヨシュアにはカナンカナンの地において町々を征服し、占領して行く戦いの前に語られていることが重要なポイントです。「足のくつ」と「足のはきもの」の訳語は異なっていますが、原語は全く同じです。それを「脱げ」という意味は、「これまであなたが歩み、経験して来た一切を捨てよ」ということです。なぜなら、二人とも立っている場所は聖なる所だからです。つまり、その場で告げられる使命の内容が「聖なる」「重い」事柄であり、人間の理性ではとても理解できない、受け入れられない、不可能な事柄だからです。このことを伝えるためにいずれも特別に御子が登場しているのです。

●アブラハムのところに訪れた3人の中の一人も実はまさに御子であり、特別な表象はありませんでしたが、シャハイナ・グローリーでした(創世記 18 章)。その人がアブラハムに伝えたことは何だったのでしょうか。それは「来年の今頃、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには男の子ができています」という告知でした。この告知を伝えるために現われたのです(創世記 18:10)。そのときすでにアブラハムは 99 歳。妻のサラは 89 歳になっていました。子を産むには不可能と思われる年齢です。しかし神に不可能はありません。アブラハムが神に選ばれたのは、神の約束を信じる信仰によって生きるというあかしを立てるためです。彼が地上で得たものはわずかでした。

●アブラハム、モーセ、そしてヨシュアに対して、御子が人となって現われたのですが、それは神の計画を実現させるためにきわめて重要なみこころを伝えるためであったということが共通しています。このことが

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

できるのは、創造の前から存在している光である方、神の知恵そのものである方、そして神の永遠に切れることのない信頼の絆の栄光を秘めた方だからこそ可能なことなのです。神の顕現の目的は、私たちのさまざまな個々の問題を解決し、改善するためではなく、神がすでに定めておられる永遠のご計画を実現するためです。それゆえ、私たちの信仰の軸を自分中心から神中心への座標軸へと移すことが必要です。そのために、私たちの心を一新すべきことが求められているのです。神のご計画、神のヴィジョンに私たちが寄り添う時、神はその者にこの世とは異なる平安と希望をもたらしてくださいと信じます。

●前回もお話したように、「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」(Ⅱコリント 4:18)のパウロのことばがどういうことかを悟らなければなりません。なぜなら、「シャハイナ・グローリー」は神の永遠のご計画の啓示と密接なつながりを持っているからです。「シャハイナ・グローリー」は、単に、神の臨在を感じたといったレベルのことではなく、みことばが開かれることによって、神の大いなる永遠のご計画とそのみこころ、神の御旨とその目的が開示される経験を意味しているのではないのでしょうか。それが「シャハイナ・グローリー」に触れるということだと理解します。とすれば、みことばに仕える者たちは、聖書における神のご計画そのものを解き明かすメッセージを語るようにならなければならないということでもあります。

2. 初めて明かされた神の名前の秘密

●モーセに対する神の召命は簡潔明瞭です。それはエジプトにいるイスラエルの民をエジプトから連れ出して、この山(ホレブ)で神に仕えさせるということです。モーセが神からこの召しを受けた時、モーセの口から出たことばは「私はいったい何者なのでしょう。」というためらいのことばでした。彼は40年前までエジプトのパロの王子としての養育を受け、パロの強大な権力をよく知っていたわけですから無理ありません。しかもその後の40年間は、ミデヤンの地でただ羊を飼うだけの生活を続けた彼にとって、果たしてどれだけパロに影響を与えることができるか、さまざまな思いが交錯し、否定的な思いになって辞退を表明します。

●しかしモーセは13節で「今、私はイスラエル人のところに行きます」と答えています。そして神との多くのやり取りをしています。それはすべて神からの召命に答えるための質疑でした。神はモーセの尋ねることにひとつひとつ応えていきますが、モーセが尋ねるたびに新しい神についての情報が引き出されているのです。たとえば、神の名前がそうです。もしモーセが尋ね求めなければ知り得なかったものばかりです。このモーセの尋ね求める姿勢はとても重要だと思います。大切な隠されたものは、神に尋ねることによってより明らかにされるようになっているからです。そのようなやり取りの中で、これまで啓示されなかった神の名前がモーセに明かされます。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 3章 13～15節

13 モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました』と言えば、彼らは、『その名は何ですか』と私に聞くでしょう。

私は、何と答えたらよいのでしょうか。」

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

14 神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた』と。」

15 神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】が、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。

●ここでは、「あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】」と、「わたしはあるという方」、あるいは、「わたしは、『わたしはある』という者である」は、同義だということです。

●すでに創世記において多くの神の名前が登場しています。たとえば、

- 「神」(「エローヒム」 אֱלֹהִים) —1章1節、他。
- 「主」(「アドナイ」 יְהוָה) —2章4節、他。
- 「神」(「エール」 אֵל) —以下のように、他の言葉と結び合わされて使われています。
- 「いと高き神」(「エール・エルヨン」 אֵל עֲלִיּוֹן) —14章18, 19, 20, 22節。
- 「全能の神」(「エール・シャツダイ」 אֵל שַׁדַּי) —17章1節。
- 「顧みる神」(「エール・ロイ」 אֵל רֹאֵי) —16章13節。
- 「備えられる主」、正確には「ヴィジョンの神」(「アドナイ・イルエ」 יְהוָה יִרְאֶה) —22章14節。

などがそうです。ちなみに、その中でも唯一、神がアブラハムに対して直接に啓示された名は「全能の神」でした。

●モーセに現わされた神の名は、「エフイエ・アシエル・エフイエ」(אֶהְיֶה אֲשֶׁר אֶהְיֶה)は以下のように訳されています。

新改訳「わたしは、『わたしはある。』という者である。」
新共同訳「わたしはある。わたしはあるという者だ。」
口語訳「わたしは有って有る者。」
岩波訳「わたしはなる。わたしがなるものだ。」
文語訳「我は有て在る者なり」
関根訳「わたしはあらんとしてある者である。」
中澤洽樹訳「わたしは〈われ有り〉という者である。」
フランシスコ会訳「わたしはある〔エーイエ〕ものである。」
新世界訳「わたしは自分になるところのものとなる。」

●以上のようにいろいろと訳されているのですが、英語では、I am that(who) I am と訳されており、

I am that(who) I am の定式の後に来る内容が重要なのです。ヨハネの福音書では、神の御子イエシュアがご自分のことを「わたしは・・・である」(エゴー エイミ)という構文の「・・・」の部分に、「いのちのパン」(6:35)、「世の光」(8:12)、「門」(10:9)、「良い牧者」(10:11)、「よみがえりであり、いのち」(11:25)、「道であり、真理であり、いのち」(14:6)、「まことのぶどうの木」(15:1)と入れて自己宣言しておられます。このように、ひとつのことばでは言い切れないために、一つの巨大なフォルダとして、「わたしはあってある者である」としたのだと思われます。つまり、イエシュアは、出エジプト記 3 章 14 節の神の名前とご自身を等しい者として現わされたのです。この名前は、まことに、神の永遠性、超越性、不変性を表わすのにふさわしいものと言えます。

●モーセにとって自分を遣わす神の名前が何かを知るとはとても重要であったはずですが、後者の「エフイエ・アシェル・エフイエ」だけではよく分からなかったのではないかと思います。その証拠に、この名前が直接人々に語ったことはありません。やがてこの名前を満たすイエシュアが登場したことで、私たちは理解できるようになってきたのではないのでしょうか。神のすべてを包み込んでしまうような名前、それが出エジプト記 3 章 14 節の「エフイエ・アシェル・エフイエ」であり、それはイエシュアの名前でもあったということです。イエシュアという名前は「救い」という意味ですが、神と人とが共にいる実体としての名前を「インマヌエル」と言います。「イエシュア」と「インマヌエル」である方を知るだけでも信仰生活はやっていけるかもしれませんが、それだけでは聖書に啓示されている神のすばらしさを知り、神を味わうためには不十分なのです。

●「エフイエ・アシェル・エフイエ」という名前は、これから出エジプトを経験して神の民となる者たちがいろいろな経験をする中で知っていく神の名前だったと言えます。たとえば、出エジプト記では、

「わたしは、あなたをいやす者である。」(15:26)「アニー・アドナイ・ローフエハー」(אֲנִי יְהוָה לְרַפְּאֶךָ)

「主は私の旗」(主の旗=勝利のしるしとしての旗)(17:15)「アドナイ・ニッスィー」(יְהוָה נֹסֵף)

「わたしはあなたがたを聖別する主である」(31:13)

「アニー・アドナイ・メカッディシュヘム」(אֲנִי יְהוָה מְקַדְּשֵׁיכֶם)

「主はあわれみ深く、情け深い神、怒るにおそく、恵みとまことに富み、咎と罪を赦す者」(34:6)

①「主はあわれみ深い」(アドナイ・エール・ラフーム) (יְהוָה אֵל רַחוּם)

②「主は情け深い神」(アドナイ・ハツヌーン) (יְהוָה חַנּוּן)

③「主は怒るにおそい」(アドナイ・エレフ・アンパイム) (יְהוָה אַרְךָ אַפַּיִם)

④「主は恵みとまことに富む」(アドナイ・ラヴ・ヘセド・ヴェエメット) (יְהוָה רַב־חֶסֶד וְאֱמֶת)

⑤「主は咎と罪を赦す者」(アドナイ・ノーセー・アーヴォーン・ヴァフエシャ・ヴェハッターアー)

(יְהוָה נִשָּׂא עֵוֹן וּפְשַׁע וְחַטָּאָה)

などと宣言されていきます。

●神ご自身がモーセに語られた「エフイエ・アシェル・エフイエ」(אֲהִיָּה אֲשֶׁר אֲהִיָּה)の動詞「ハーヤー」(הִיָּה)の未完了形は、ある事柄が継続した状態を表しますので、過去、現在、未来のいずれにも用い

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

ることができます。その例としてイエシュアが言われた「わたしは・・・である」というエゴ・エイミーは、常に永遠性をもった自己啓示です。黙示録 1 章 4 節もそのヒントになります。「常にいまし、昔いまし、後に来られる方」(Him who is, and who was, and Who is to come)。もう一つ、ヘブル書 13 章 8 節の「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも同じです」もヒントになります。

ベアハリート

●「天からの光」に照らされた使徒パウロもモーセと同様、シャハイナ・グローリーを経験した人ですが、彼は自分に与えられた使命を次のように語っています。少し注釈したことをばを入れて読みます。それはこうです。「**彼ら(ユダヤ人と異邦人)の目を開いて、暗やみ(の圧政)から光に、サタンの支配から神(愛する御子のご支配の中)に、立ち返らせ(移して下さり)、信仰によって・・・御国を受け継がせるため**」(使徒 26:18)。

●エジプトにいたイスラエルの民がそこを脱出できたのは大いなる奇蹟です。しかし、暗やみのなかにいる私たちがそこから救い出されて光の世界、すなわち、御国に入るとはさらなる奇蹟です。前者は後者の型(予型、ひな型)だったのです。かつてアポロ宇宙船が月に行くことができたのは、地球の重力から脱出できたからです。地球の場合の脱出可能な速度は、秒速 11.2km だそうです。これが木星の場合だと秒速 60km、より大きな質量をもつ太陽になると秒速 613km。すごい力です。しかし太陽以上の星もあるようです。直径がわずか 15km しかないにもかかわらず、質量は地球の 33 万倍だそうです。その星の重力から脱出するための速度はなんと秒速 19 万 km です。それでも光ならばその星の重力から脱出できます。なぜなら、光の秒速は 30 万 km だからです。しかし、その光の速度をもってしても脱出できない見えない星(ブラック・ホール)というのが宇宙にはあるのです。光さえ吸収してしまう引力を持っているため、その存在が見えないのです。ブラック・ホールにひとたび引き込まれたならば、永遠にそこから脱出することはできないのです。しかし、もう一度、神のみことばを見てみましょう。

「**暗やみ(の圧政)から光に、サタンの支配から神(愛する御子のご支配の中)に、立ち返らせ(移して下さり)、信仰によって・・・御国を受け継がせる**」(使徒 26:18)

●暗やみの力、サタンの支配とは、まさに霊的な意味での「ブラック・ホール」です。私たちの知恵や力によっては、この暗やみの支配から脱出することは絶対に出来ません。暗やみの力から救い出して下さるのは神の御子イエシュアだけです。ですから、すでに、私たちはすごいお方と出会っているわけです。たとえ私たちが自覚しようとしまいと、客観的に見るならば、すでにシャハイナ・グローリーを経験しているのです。ただ私たちが受け取っている光の量が少ないために、それを十分に理解できていないだけのことです。ですから、詩篇の作者のように、「みことばは私の足のともしび、私の道の光です。」と告白できるように、みことばを通して、愛する御子を親しく知りつつ、その方が支配される(打ち立てられる)御国のすばらしさをより深く知って行けるように祈り続けていきたいと思えます。

2015.12.13